

新たに船出するあなたへ

社会人

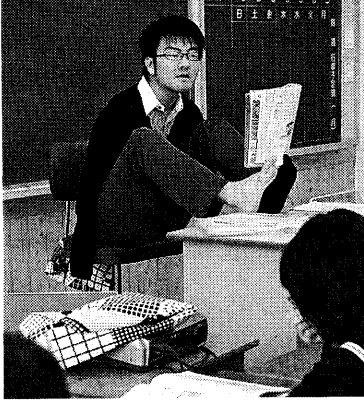
番外編

「できることは一生懸命 てくれた大学の恩師……。やり、できないことは工夫 「よいところを引き出してする。それでもダメなとき くれる人との出会いに恵まは割り切って、助けが欲しいから今の自分がある」といふと伝わる勇気を持つ」。

4歳の時に事故で両腕を失いながら、愛知県西尾市で 中学校の英語教員になった 小島裕治(こじま・ゆうじ、29)は、ハンディを抱える 若者にエールを送る。

「例えば僕は重い荷物を 持つことができない」。高 校までは、この「できない こと」への負い目が先に立 ち、殻に閉じこもりがちだ った。しかし、多くの師と の出会いで「できることに 目を向け、それをどう伸ば すか」と考えられるように なったという。

冷めていた自分に「バカ になれ」と活を入れてくれ た高校の先生、留学を勧め



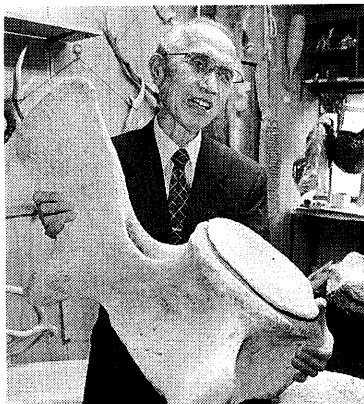
両腕を失いながら教師となった小島さん

助け呼ぶ勇気を

小島自身、教師2年目。 同じ内容の授業でも、ある クラスでは生徒が目を輝か せ、別のクラスでは反応が 鈍いなど、教えることの難 しさを感じている最中。校 務の多さにも驚く。「振り 返ると楽しい。その時々は大変だけど」。逆風の中 こそ、やりがいを見いだし ている。

盛岡市の自宅で視覚障害 者向けに3000点の展示 物をそろえた博物館を無料 で開く桜井政太郎(さくら い・まさたろう、73)は、 盲学校の教員として実社会 へのスタートを切った時の ことを鮮明に覚えている。

小学生で失明し、不安を 抱えながら新生活の門出 だった。約7時間、夜行列



展示品のクジラの骨を説明する桜井さん

きずなを大切に

車に揺られ赴任地の岩手県 に着くと駅舎に4人の同僚 がいた。縁のない土地で働 く新人を案内しよう、と出 迎えてくれたのだ。「体に 気を付けて頑張り」。付き 添いの父がほっとしたよう に別れの言葉をかけてく れた。自分は多くの人に 守られていると感じた。

「月並みでもあいさつか ら始まる人間関係に常に気 を配ってきた」という。訓 練でハンディをカバーした とはいえ、「できないこと は絶対にある。助けてもら うとき、日ごろの関係がも のをい」と感じる。

今、後輩らが働く職員室 を訪れると、一抹の寂しさ も覚える。「皆パソコンに 向かって仕事をしていて本 当に静か。自分のころはい



伴走を長年続ける鈴木さん

役割の重さ知る

つもわいわいしていたか けはいいが、と心配する。 「鈴木さんが来てくれた ら」。機械に囲まれ、人と 人とのつながりが薄れなけ りたいが、と心配する。

最近の一番の喜びは有志 から贈られた法隆寺の模型 が展示物に加わったこと。 「これは子どもにも構造が よくわかる」。積み重ねて きた周囲との交流が生き、 退職後も学びの光を与え続 けられている。

現在は講習会で全国を回 るが、生徒の中には、慣れ につれて伴走者である自 分を「主役」にしがちな人 が出てくるのが気がかり。

視覚障害のあるマラソ ンランナーと短いロープを握 り合い、彼らの目の代わり になってコースをともにす る「伴走」。川崎市の鈴木 邦雄(すずき・くにお、64) は、この伴走を約30年間続 けてきた。

会社員時代、「ボランテ ィアするなら、仕事をしろ」 と上司から言葉を投げかけ られた時期もあったが、長 く続けられた理由を、「自 分の役割の大きさに気付か されたから」と強調する。

最近、障害者ランナーが 増えてきたから、と自分中心にな らず、あくまで弱者の心情 を理解し、寄り添ってほし く続けられた理由を、「自 分の役割の大きさに気付か されたから」と強調する。

「目の不自由な人は、私た ち伴走者がいなければ絶対 に走れないんです」

初めて視覚障害のある人 たちの前に出る時は「かわ やばらない、静かな励まし いそう」とか「暗い人たち がにじんでいる。」敬称略